
オートファンタジー

白山普琴

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

オートファンタジー

【コード】

N1980C

【作者名】

白山普琴

【あらすじ】

名前のない村で、やりきれない暮らしを送るマーマ。突然はじまる<闇の鳴る夜<眼を開けると、純白の妖精が立っていた。その妖精は、謎の言葉を残し、マーマの、まだ生まれていない子供に同化する。<序話>

序話 遭遇

藁小屋が点々と目立つ、名前のない田舎村。

唯一の煉瓦づくりの家に、村人たちは列をつくって並んでいた。

その先頭で、マーマは汗をかき身振り手振りで語った。

「眼が、光っていたよ。なんせ>闇の鳴る夜くだったんだから。そりゃあ、わかるよ。ぼんやりと、なんてもんじゃない。カツと、真夏のまつ昼間の、太陽みたいに、まぶしかった」

マーマは唾を飛ばす勢いで言った。

聴いていた官僚は、マーマの、しもぶくれたアゴを掌でわしづかみにした。爪が、青い。

「ほんとうか？」

「うぞは、づがない、です」

「ふん」

マーマは振りほどかれたアゴをなでながら愛想よく笑った。

「それは、どこにいた？」

緑色の国軍服を着た官僚は、時々あごのひげを撫でながら、手に持った金貨を、こつこつと机にうちつけた。

マーマは上下にゆれる金貨を目で追いながら、

「隣の、どこだったかな、とにかく、隣の、どこかに、いたんです。なんせ>闇の鳴る夜くだったんだから、しかたないでしょ？」

官僚は、ため息と同時に、金貨をマーマの足元へ放った。

金貨が二枚、マーマの煤けた革靴に当たって、床に落ちた。

マーマは急いで金貨をひろい、官僚をみた。

「次の人」

すでに官僚はマーマをみていなかった。

マーマは帰路、石畳の橋にもたれて、オレンジ色の夕陽をながめた。

色つきの妖精の情報を教えれば、一生、働かないで暮らせるほどの金貨を貰えるはずだった。

二枚の金貨を握り締めた。ドブ川に投げ棄てたい気になるのを、歯をくいしばって耐る。

「色つきと合体したやつなんて、コナテカймへ行けば、どこにでもいるじゃないか！」

マーマは木屑まみれの我が家に戻った。

工場では、妻メリーが、木彫りの人形を彫っていた。

マーマは、メリーの持つ人形を払った。机の上の木屑と一緒に、メリーの人形が床に落ちた。

「あー！」

メリーのお腹は膨らんでいる。あと一月で生まれる予定だ。

マーマはため息をつく。

生活のかてがない。木彫りの人形だけでは、食っていけない。

「どう、だったの？」

床に落ちた人形を拾うメリーに、マーマは金貨二枚を投げた。

「たった、それだけだ」

メリーは気落ちしたように、金貨と人形を拾った。

「そう、これだけなの」

マーマは激怒した。

「なにか文句があるのか！」

マーマは疲れて、言葉を途中で切った。

だいたい、〈色つき〉の妖精を隣町で見たと言ったのはお前だろう。お前が悪い。たったこれっぽちの金貨のために官僚に会ってきた俺の気持ちは…。

気力すら湧いてこなかった。こんな、金貨のない人生にも、都会から離れた土地に暮らしているのにも、役に立たない女房にも、疲れていた。

「マーマは、メリーの横に座って、酒を飲んだ。癒してくれるのは、酒だけだ。酒は、勇気と酩酊を与えてくれる。熱心に小枝に向かうメリーの手先に、マーマはわざと足を突き出したり、作業台をひっくり返したりした。メリーはそのたびに、黙って人形を拾う。」

「そんな、1金にもならない人形」

「このお守りは官僚さん達に、頼まれたの」
「マーマは眼をむいて喜んだ。」

「ほお！　いくらになった？」

「間をおいて、メリーはおずおずと、」

「た、タダで」

「はあ!？」

「マーマは作業台を拳で殴り、怯えるメリーを睨みつけた。」

「子供は棄てる。面倒はみない。それがいやなら、出て行け！」

興奮したマーマは、扉を開け、

「帰って来るまでに答えを用意しておけ。いいな」

「メリーはうつむいて、答えない。」

「マーマは外に出た。」

外はすっかり夜だった。妖精が気ままに飛んでいる。ペアでいる妖精や、素早い動きで移動するもの。掌くらいの大きさの奴から、大人の人間と変わらない背丈の奴もいる。しかし、<色つき>はいなかった。どれも、ぼんやり白色に光っている。厳密にみれば、ひとつひとつ明度は違う。しかし明確な違いはない。

右に左によるけながら、マーマは馴染みの飲み屋に向かった。

途中、妖精にぶつかっては、妖精を罵倒した。妖精はマーマを観てくすくす笑うだけで、彼等、彼女等は言葉を持たない。

「どけ！　何の役にも立たない虫けらどもめ。貴様等は人の哀しみがわかるのか。人の怒りがわかるのか！」

マーマは短い足で、足元にいた背の低い妖精を蹴り上げた。マーマの足は妖精の体をすり抜けた。マーマは勢いあまって尻餅をついた。

「ちくつしよー、なめんなよ！」

辺りの妖精は笑うばかりだった。

マーマは酔いのせいか、平衡感覚を失って、立ち上がれなかった。突然、辺りの妖精達が静かになった。潮が引いて行くように、マーマのそばから去ってゆく。

「わあ！」マーマは耳を塞ぎ、顔をふせ、眼を閉じて、歯を食いしばった。あまりの音量に、聞こえてくる言葉の意味がわからない。

>闇の鳴る夜<は1月前に終わったばかりじゃないか。それに今日<闇の鳴る夜<だとしても、この音量は異常だ。

ふつと音が消えて、マーマは恐る恐る見上げた。

マーマは息を飲んだ。真っ白な妖精が立っていた。>色つきくではない。けれどもその妖精は他の妖精のように、ぼんやりと光ってはいない。

妖精は純白すぎて、顔形がわからない。体長は、マーマより少し高い程度なのに、マーマは圧倒されていた。

純白の妖精は、マーマに手を差し出した。

マーマはゆっくり持ち上げられ、やさしく地面に立ち上がった。

「君の息子が君と旅をする頃。君の息子が君の人形と旅をする頃。君の息子が君に命乞いをする頃。君の息子が君を殺す頃。君の息子が君を許す頃。>闇の鳴る夜<は君の息子に語るだろう。運命だ。宿命だ。君の息子は、選ばれたと同時に選んだ。君も、力ある私ですら。しかし！今夜は>闇の鳴る夜<だっただろうか？」

純白の妖精は、マーマの手を離すと、光の粒子になって、マーマの体をすり抜けた。

マーマは光の行方を追った。

光は、マーマの家に吸い込まれてゆくようだった。

マーマは急いで、家に飛び入った。

メリーは椅子に腰掛け、気を失って、両腕をだらんと下に垂らしている。膨らんだお腹に、光の粒子が入ってゆく。

マーマは腰を抜かして、じっと光の動きをみているしかなかった。光がなくなり、マーマは、メリーを揺すった。

「あなた、真っ白い光が」

マーマは胸を高鳴らせていた。

とてつもない幸運を、手に入れた。

マーマはメリーの涙を拭いながら、ふとそう思った。

序話 遭遇（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第1話 君の息子が君と旅をする頃 「前編」

夜に生きる妖精達は、朝日に照らされて消えてゆく。

とうとうこの日がやってきた。13歳の誕生日。

オートはベットから起きて、拳を握った。昨日とは違う。僕はやれる。

「もう、起きたの？」

メリーはオートを見ながらも、手元を忙しく動かしていた。ワラで出来ているお守り人形を手馴れた手つきで作っていた。

「今日から、仕事の手伝いをしていいんでしょ」

灰色にくすんだ布の服をまとつて、体を伸ばした。

お守り人形の効果はともかく、人形を売らなければ今日の食べ物には手に入らない。しかしオートの住む田舎村では、お守り人形はあまり売れない。

ほとんど顔見知りで、村人全員が買ってくれたとしても1金にもならないからだ。一日一食食べるのにも2金がかかるのに。

「あなたは学校に行くの」

「がっこうは、つまらないよ」

「今はつまらなくても・・・」

ドン！ 扉が開いた。赤い鼻をしたママが、酒の息を吐きながらオートに近づいてきた。

「オートおお。今日で13歳だなあ。やっと俺は定年だ。もう酒がまんする理由がなくなつたぜえ。これからはお前が、街まで売りにいくんだ」

一日だつて酒を切らした事のない父親に、オートは顔をしかめた。「いいえ。オートには学校に行くの」

ママのしもぶくれた顎にはヨダレがひと筋、光っている。

「はあ！！ まだ俺に働けつて言うのか！ 酒代も稼げねえ、ちっ

ぼけな人形ばかり売り歩いてる俺の惨めさがわかんねえのか!」

オートは、マーマの前に立った。両手を広げた。

「母さんに、手を出すな」

マーマは腰を下ろして、オートと同じ高さの視線になった。

「俺が一度でも、いちどでも! 母さんを殴った事があつたか?

んん?」

オートは思い出していた。

お父さんには、お父さんの考え方がある。酒を飲んでいない父さんは、よく愚痴を言っていた。

「ぼくには、僕の考え方がある!」

オートの頭よりも大きな掌でマーマは、オートの栗色の髪の毛を驚づかみにした。メリーが止める間もなく、オートの額は作業台に打ちつけられた。

「きやああ」

メリーは悲鳴を上げた。

オートはうずくまった。額をぬぐってみると、赤い血が手の甲についていた。痛みはない。けれども、ぬぐっても、ぬぐっても、血は止まらなかった。

メリーは自分の袖を破つて、オートの額に巻きつけた。

「そんなボロを巻いたんじゃ、かえって悪化だ」

マーマは奥に行き、オートが寝ていたベットに寝転んだ。

「医者に見せるんじゃねえぞ。金がねえからな!」

オート達に背を向け、いびきをかきはじめた。

「お医者様にみてもらうわよ」

オートは首を横に振った。意地もあつた。僕には僕の考え方がある。今優先しなきゃならないのは、金を稼ぐことだ。金があれば、母さんは寝ずに人形を作るなんてことはない。金があれば、父さんは愚痴をいう事はない。金があれば、今、血を流すこともなかった。「もう、治った」

オートは、にこりと笑顔をつくった。

「だめ、見てもらわなきゃ」

マリーは、オートの腕を引っ張り、外に出た。

この田舎村には、煉瓦造りの建物が一軒だけある。そこには国の兵士が常駐していた。そこに、村で唯一の医者がいる。街から赴任している人で、く色つきだ。

歩いているうちに、オートの額からは血が垂れてきた。

マリーは扉を叩いた。煉瓦造りの建物の中から、緑色の国軍服を着た、背の高い、細面の男が出てきた。

「なんだ？」

いかにも官僚らしい、傲慢な言い方だった。

「この子が、怪我をしまして」

オートは上から睨まれ、寒気を感じた。背の高い官僚の指先が、オートの目線にある。爪の色が、青かった。

「もういい、行くうよ」

言ったとき、背の高い官僚が、オートの額にふれた。

「あ」

マリーが巻きつけた袖を、官僚が解いた。

「5センチ、切っているな。君、これが何色に見える？」

官僚の手が、オートの目の前につきつけられた。爪が、青い。

「ああ・・・」

「青は冷たい。そう思うかい？」

「青は、冷たい・・・うん」

「いい子だ。ふう。さあ、この息も、青く見えるだろう・・・」

官僚の息が、だんだんと青みを帯びてくる。

「すごい、青・・・」

青い息が傷口に触れた。

「冷たい！」

オートは身を引いた。

恐る恐る額を触ると、青いガラスの破片のような物がばらばらと

落ちた。

メリーは驚いていた。オートの傷口から流れていた血が、氷の結晶になって落ちたのだ。傷口も氷で覆われている。

「ふふ。これで大丈夫。念のために、この布も巻いていたほうが良い」

官僚は、袖にも息を吹いた。

袖が、真青に染まっていく。

「多少、冷たいが」

とオートの額に巻いた。

額に当たるときは冷たかったが、巻きつけられると気にならなくなった。

「あ、ありがとうございます。あの、申し訳ないのですが、代金は、後でよろしいでしょうか」

官僚は「ふふ」と笑った。

「代金？ 後でけっこうですよ」

「ありがとうございます！ 来週には、必ず」

オートとメリーは煉瓦造りの家を後にした。

途中、オートは振り向いた。

青い爪の官僚が、じつとこつちを見ている。

オートは早足になった。メリーの手を引くくらいに。

第1話 君の息子が君と旅をする頃 「前編」 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第2話 君の息子が君と旅をする頃 「中編」

夕空が、コナテカイムの街をオレンジに染めてゆく。青いバンダナを付けているオートが、煉瓦造りの家々を訊ねてまわっていた。

道も家も煉瓦で舗装されて、ゴミ一つ落ちていない。行き交う人々はシルクの服を身にまとい、飼われている犬は肥えている。彼女等からみれば、汚いものというのはオートくらいなものだろう。つまり乞食だ。彼等彼女等は身なりで人の優劣を決める。

笑顔で応対に出てきた人は、オートの身なりを見るなり態度を変えた。そして煙たがる。

それでもオートは握り締めたワラ人形を、売らなければいけないかった。

お腹が鳴った。オートは空腹だった。

メリーが夕飯の支度をしている時に、人形を持って家を出てきた。ママが持つて帰ってくる金が無くなった今、自分が人形を売りに歩かなければ母さんは自分の食事を減らすだろう。オートはそれが我慢ならなかった。

「すいません」

コナテカイムの街中にあっても大きさを感ずる屋敷。夕陽が傾いで、赤い屋根に光沢があった。

「はい？ どなた」

扉が薄く開けられた。

香ばしい匂いがする。オートは生唾をのんだ。

黒髪の少女が出てきた。オートと背丈に差はない。

「あの」

と人形を差し出したとき、少女は後ろに立った婦人に抱えられた。「ミウナ、おじいちゃんの所に行つてなさい」

少女は階段を登つて行つた。けれども階段の途中で止まり、手す

りの隙間からオートの方をみてきた。

オートは婦人に見下ろされた。婦人も真つ黒な髪の色をしていた。少女に似ている。

「ぼく、何か用？」

「お守り人形はいりませんか」

オートは握り締めていた人形を婦人に差し出した。

「いらないわ」

「効き目は保障します。前の戦争の時、ゴルガル陸軍主将が身につけていたといわれています」

「いらない、と言ったでしょう。官僚を呼んでもいいのよ？」

オートはうなだれた。

「ごめんなさい」

扉が閉まった。

泣きそうになるのをこらえた。次だ。コナテカイムの街は広い。

きつとどこかに買ってくれる人がいるはずだ。父さんだつて売り歩いていたんだから。

オートは屋敷を離れた。

コナテカイムの露天市場には、野菜や果物、穀物に魚、ありとあらゆる食材が売っている。

種類の豊富さは大陸のなかでも最も多い。それはコナテカイムが大陸の中央に位置するのに関係がある。魚は、東の海から毎日、車で運搬され、その他はコナテカイムを構成する107の地域から運ばれる。コナテカイムはコナテカイムの人と物が集中していた。

露天市場でも、オートの身なりは目立っていた。

眉間にシワをつくった大人たちに何度も睨まれた。

「おい、触るなよ！」

体格のいい店主が、オートを見た。

「あの、お守り人形は……」

「おい！ 近づくな！ ハエがこっちに来る」

オートはお腹に穴が開いたようで、店主が何を言っているのか、

上の空だった。

思わず、露天に手をかけた。

瞬間、店主の大きな掌が、オートの頬を張った。

オートは煉瓦の地面に、うつ伏せに倒れた。

「おい、誰か、官僚を呼んでくれ。泥棒だ」

辺りの人のざわめきが聞こえる。

「うわ、汚い子」「死んでるんじゃないのか」「臭いわ、この子」

「邪魔だよ、はやくどけてくれ」「乞食ね。死ぬなら他で死になさ

いよ」「こんな乞食でも公費で燃やすんだぜ。公費がもつたいないよなあ」

伏せたまま、オートは泣いた。なんで世の中はこうも理不尽なんだろう。なんで僕は金持ちに生まれなかったんだろう。

立ち上がる力もなく、じっとしていると、脇を抱えられた。

「おい、眼、覚ませよ」

頬を張られた。

眼を開けると、国軍服を着た官僚が目の前にいる。左右の揉み上げがアゴヒゲを通して繋がっている。

「とつとと連れて行け！」

店主が怒鳴った。

「だまれ。お前も連れて行くぞ？ みなさん、ほら、歩いて。通行を妨げないで」

市場に流れがもどった。

オートは髭面の官僚に背負われた。

眼が腫れて、視界が悪い。官僚の背に揺られながら、行き交う人を怨んだ。

「その人形、君が売り歩いてるのか？」

オートは切れた唇を舐めた。血の味はお腹の足しにはならない。

「うん」

「いくらで売ってる？」

馬鹿にされてる気がした。もしくは、怒られそう。

「5金」

高く言ってやった。

「そうか」

オートが降ろされたのは、コナテカイムから南に出た所だった。ここからさらに南へ2時間歩けば村に着く。

オートが歩き出した時、官僚に呼び止められた。

「手をだしな」

官僚の手から、巾着袋を受け取った。

中を覗くと、数えられないくらいの金貨が入っていた。

「え、これは……」

「20金入っている。お守り人形を4つつだ。落とすなよ」

「は、はい！」

官僚は引き返そうとした。

「あの、どこに人形を届ければ……?」

「ああ、取りに行く。君は、あの、名もない田舎村に住んでるんだろ?」

「え……」

コナテカイムの方から、人が走って来た。国軍服を着ている。

「副将、ゴゾ副将〜!」

オートは村に向かって駆け出した。髭面の、ゴゾ副将と呼ばれた人の気が変わる前に、場を抜け出したかった。

辺りには白いもやが出てきていた。ちぎれ雲のようなもやは、やがて妖精になる。

夜はちかい。

第2話 君の息子が君と旅をする頃 「中編」(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。
度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第3話 君の息子が君と旅をする頃 「後編」

闇をただよう妖精達は、駆け足のオートを茶化すかのように、オートの手や足にまつわりつく。オートは一度も休むことなく、走った。青いバンダナが風になびく。握りしめているワラのお守り人形には、手形がついてしまった。

舗装されていた道は、村に近づくにつれて荒れていった。

月は新月で、一筋の光もない。

オートは歯を食いしばった。一刻も早く、母に金貨を見せたかった。

背後が怖い。

野良犬や怪鳥が襲ってくるんじゃないか。わき道から、飢えた人がわらわらと出てくるんじゃないか。

オートは絡み付いてくる妖精達を気にもとめなかった。

村が近づくにつれて、オートは自然と笑顔になった。どれほどお母さんは喜ぶだろう。

「幸運とは、天の恵みを差すのではない。天の恵みを離さない行為を言うのだ」

こう言つて、ゴルガル陸軍主将は劣勢の状況からコナテ国を立て直す政策を打ち出した。

オートは呟いた。

「天の恵みを離さない行為を言うのだ」

今こそその行為を実現する時なんだ。

辺りの妖精がいなくなっていたことに気が付いたのは、村の灯が見え出したころだった。左右を見ても、あれだけ浮遊していた妖精が一匹もない。

オートは走りをやめた。

嫌な予感がする。

獣や盗賊に襲われるよりも、金貨を盗られるよりも、もっと不安な予感が。

村に、帰っては、いけない。そんな感情がふつふつとわいてくる。けれども足がとまらない。

村の灯は、不自然に輝いていた。

その輝きが炎だと気が付くのに、それほど時間はかからなかった。コナテカイムに引き返すんだ。

オートは炎に向かって歩く。

オートが育ったワラ家は、オレンジ色と黒色の炎のなかでぱちぱちと鳴っていた。

炎の前には5、6人の、国軍服を着た大人がいた。

言葉なく立ち尽くすオートにはじめて気付いたのは、青い爪の官僚だった。オートの額の傷を診た、長身の男だ。

「そこに、いたのか」

オートは1歩後ろにさがった。

国軍服を着た大人たちが、一斉にオートを見た。

「怖がる事はない。火の不始末だろう。かわいそうに。さあ、こっちにおいで」

オートは首を横に振った。

長身の男は、オートに向かって近づく。後ろの炎のせいで長身の男がゆれて見える。

青い爪が、オートの腕をつかんだ。

長い足が屈折し、長い腕がオートを抱きしめた。

オートはお守り人形を落とした。

「ああ、怖いだらう。けれども悲観することはないんだよ」
ぼうぼうと燃えるワラは、天を灰色にした。

「君は私が育ててあげるから」長身の男が、ぼそりと言った。

「母さんは・・・かあさんは！」

「大丈夫だよ。今は何も考えないでいい」

国軍服の大人たちが、何かを囲んでいるのが眼に入った。

布袋のような、大きくて、ふくらみのあるもの。そのふくらみは、時々ぴくりと動いた。

それは、人間だった。

火の粉が、倒れている人間にふりかかっていた。顔がわずかに動いた。オートは眼を合わせた。

「とう・さん？」

オートは長身の男をはねのけた。

マーマは切れた唇から血を流し、倒れていた。両目のまわりにあざがある。

「とうさん、父さん！」

揺ると、マーマは眼を開けた。

オートは首を、マーマに掴まれた。一瞬の事で、オートはわけがわからなかった。息が詰まる。

「てめえ！！ お前のせいで、お前のせいで！」

国軍服に、引き離された。

オートはしりもちをついたまま、ぜえぜえと息をととのえた。

「くそ。お前さえいなけりゃ！！ ぐっ」

マーマは国軍服に腹を蹴られてうめいた。

「やめて、やめて！」

オートが叫んでも、マーマに対する暴力はやまなかった。重い音がマーマの体から響く。

「もう、意識はないだろう」

長身の男が言った。

男たちは直立不動の姿勢をとった。

「ぼうや、怖かったろう？」

長身の男は、青い爪を、マーマの額に当てた。

オートに、冷たい記憶がよぎった。

ふう、と吹かれた息がみるみる青くなって、マーマの全身を包んだ。

「や、やめて。やめて！」

長身の男は細面をオートに向け、うつすらと笑った。

「ママの額が凍り始めた。冷気がオートの足元までただよってきた。」

「うわああああああ」

オートは怯えていた。頭の中がぐちゃぐちゃになって、ただただ叫んだ。

息を吐き続ける男は息を止め、空を見た。

「闇が、鳴いているだろ？」

呟いた瞬間、猛烈な音が響き渡った。

「退け！ プリズナーが覚醒するぞ！」

長身の男は、自分の耳に手を添えた。耳の周りに氷の膜をつくった。

国軍服の男達は全速力でママから離れた。

オートは、真っ白な情景を見ていた。何も考えていないのに、世界のありとあらゆる物を見通せるような。

「真っ白な世界に、誰かがこっちに向かってくる。妖精？ とても大きくて、たくましくて、それなのに、やさしい。この人と、手を繋ぎたい。」

オートは手を差し出した。

「その年で覚醒とは・・・、新記録だな」

長身の男は、ぱちん、と指を鳴らす。

手と手がわずかに触れ合った瞬間、オートは額に冷気を感じた。

頭を氷付けにされているようで、頭痛が貫く。

「うあああつあ」

オートは額を抱えてうずくまった。真っ白な世界から、現実を引き戻された。

「トランプを仕込んでおいて正解だった」

バンダナが、冷たい。

オートはかるうじて目を開けた。力なくたおれているママが視

界に入った。その向こうに長身の男が立っている。

一瞬、目の前に、白い人の姿が見えた。

白い人は言う。幸運とは、天の恵みを離さない行為だ。

離さない。オートは掌を、青の男に向かって突き出した。

天の恵みを、はなさない。

オートは長身の男が視界の中に入るように、拳を握った。急激に力が抜けた。地面に突っ伏す。

「なんだと！！！」

青の男と、ママが、白く丸い膜に覆われた。青の男の背後にいた男達も、膜に覆われる。

膜は狭まっていく。国軍服の男達は白い膜の中で暴れた。けれども膜はやわらかく、力を分散し、中にいるものはあかく事しかできない。

膜は小さくなるにつれて白味を増し、強度を上げた。

オートは辛うじて片目を開けていた。

「この程度で！」

青の男は膜の中で、右腕に氷をまとい、膜を叩き付けた。

砕けたのは、腕のほうだった。

「こんなところで、こんなところで！」

膜は容赦なく、青の男の声を飲み込みながら、収縮していく。

青の男は、ふところから緑色の紙を取り出した。ふっ、と息を吹きかける。

「必ずこの怨みはかえす！」

緑色の紙を握ると、青の男は膜の中から消えた。

オートが眼を覚ますと、ママや国軍服の男達はいなくなっていた。

空はしらじらと明けている。

ふと眼を下に落とす。

マーマが倒れていたところに、真っ白な球が落ちていた。

球は真珠球程度の大きさで、掌に転がるくらいだった。オートは真珠球を拾った。

辺りをみると、同じような球が点々と直線上に落ちている。

オートは頭痛に耐えながら、巾着袋とお守り人形を探し出した。

巾着袋のなかの金貨は無事だった。巾着袋に珠と人形を入れ、ふらふらと歩き始めた。

母さんは？ あの、真っ白な世界で出逢った妖精は？

オートは青いバンダナをなびかせて、コナテカームへ向かった。

この村から早く立ち去りたかった。誰も追いかけて来ないうちに。

第3話 君の息子が君と旅をする頃 「後編」 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第4話 ミウナ

コナテカイムには、人々が生きている、という実感がある。ある人は成功して財産を築き、ある人は失敗して路肩にうずくまる。恋人同士は手を繋ぎ、老夫婦は寄り添って歩く。母親は父親と共にわが子を公園に連れて行き、子は友人達と走り回る。

ミウナは二階の窓から人々の様子を観察するのが好きだった。人が集まって国になり、国があつて秩序ができる。なんておもしろいだろう。コナテカムイに暮らす人々は皆笑顔で、その基礎には国があつて。

「ミウナ。早く着替えなさい。お父様が帰ってこられるわよ」
ミウナの母は胸元の開いた、紺のドレスを着て、端正なお人形のようにだった。

「お母様、今日は学校に行かなくてもいいんでしょ？」

ミウナは12歳。国立コナテカイム基礎学校の生徒だった。

「ええ」

「だったら、毎日お父様が帰って来られたらいいのに」

ミウナはふくれた。

「これを着なさい」

ベットに広げられたドレスは純白だった。

「うわあ、真つ白なドレス。なんだかいつもより豪華」

「今日は大事な人に会うのよ。粗相のないようにね」

お母様は部屋を出て、ミウナはうっとりとして、ドレスに釘付けになった。

部屋の窓が、とん、と鳴った。

ミウナは慌てて窓に寄り、下をみた。金髪の少年が、ミウナをみ

て、手を振った。ミウナも手を振りかえした。

部屋を出て、階段を降りる。

「あら、どうしたの？」

「すぐ帰りますから」

母の脇をすり抜けて、ミウナは外に出た。

「こんにちは、アレエン」

金髪の子供は、ぼろの布の服を着て、ミウナのシルクの服とは対照的だった。

「こんにちは。ミウナ」

二人は並んで歩いた。

秘密基地はコナテカイムの西、立ち入り禁止地区にある。子供達は平気でその地区に入っていく。

腐った大木にワラで屋根をつけ、子供達は雨をしのげるようにしていた。そこにはいつも3、4人の子供がいる。家のない彼等、彼女等は毎日をそこで暮らしていた。

子供たちのなかで、リーダーなのがアレエンだった。彼はコナテ人と異国とのハーフだった。顔が小さく、整った顔をしている。眼と髪の色がコナテ人とは違っていた。コナテ人は黒髪が一般的だ。「今日は何をやるの？」

金色の目がミウナをみた。

「歴史をやりましょう」

はじめてミウナがここに来た時、子供達は文字を書くこともできなかった。

今では簡単な算数もできる。

「ええ。言葉を教えてくれよ」

「こんどね。歴史は大事なんだから」

「国のことなんか、何の役に立つんだ」

「あなたが今、生きている場所なのよ。それに、あなた達は、将来偉くなって、この国を背負って、がんばるんだから」

子供達は笑った。

「ミウナは馬鹿だな」

やせ細った子が言った。

「どうして？」

「俺たちはこの国の厄介者だぜ」

「そんなことない！ この国は皆に平等なんだから」

また、みんなが笑う。けれども、アレエンは真剣な眼差しを向けていた。

「ミウナ、俺たちはどうすれば偉くなれる？」

アレエンが言った。みんなは一斉にだまった。ミウナの答えを待っている。

「とにかく、今は勉強すること」

ミウナはやつと答えた。けれどもアレエン達が納得するとは思えなかった。自分がなさけなくなる。

アレエンが突然立ち上がった。

「俺は、必ず、偉くなる！ 広い土地を持って、雲にとどくくらい大きな家を建てて、何千、何万の私兵をもって」

アレエンは間をおき、ミウナをみつめ、

「綺麗な、とつても綺麗な人と一緒に暮らす」と呟いた。

ミウナは手を叩いた。やっぱり、この国には希望がある。

「その勢いよ！ かならず、夢は叶うわ」

アレエンは顔を真っ赤にした。

「じゃ、歴史の話をするわね」

夜、妖精達が姿を現し、賑やかに街を彩る。

「お母様、今晚は妖精の姿が多いわね」

妖精の中には、青色や緑色、黒色の妖精もいた。

ミウナは白いドレスを着て、車に乗り、母と共に夜の街を走っていた。

黒塗りの車の車内は広く、大人二人が寝転んだとしても余裕があるだろう。

「昨日は、闇の鳴る夜だったじゃない」

「ああ、そっか」

「そんな、寝ぼけたような答え方しないでちょうだい」

「あ、ごめんなさい・・・」

「向こうに着いたら、何も喋らなくてもいいからね。はい、と、いいえ、だけで良いのよ」

うなづくミウナは頭をなでられ、微笑んだ。

コナテカムイの中心には、国会議事堂がある。煉瓦造りの、円錐形の建物が二本、並んで建っている。正面に向かって右側の建物はパーティ会場にも使われる。ただしこの施設を使えるのは国会議員および官僚の関係者だけだった。

「やあ、シャラナンテ」

「こんばんわ」

ミウナの母は次々と挨拶に来る官僚や、国会議員にいちいち挨拶をした。

「大きくなつたね、ミウナ」

そう言われれば「はい」と言つて微笑むのがミウナの仕事だった。

しばらくすると、パーティ会場に声がこだました。

「みなさん、主役が登場しますよお!!」

辺りは静まりかえる。

ミウナは興奮していた。お父様が帰ってきた。

「今回の主賓、光のブループリズナーであり、コナテカムイの英雄、ゴルガル陸海空軍全権主将の愛弟子! 彼を称える言葉は山のようにあるけれど。言わずもがな皆さんご存知、最強のプリズナーである称号、光神の称号を、あの、あの破国人はこくじんから得た男。ダ・ゴラー
ジュー!!!」

盛大な拍手。

ミウナは感動で涙が出そうだった。

ゴラージュは、奥の壇上に、はにかみながら登場した。のど元に、青いアザ。黒髪をオールバックになでつけている。

「どうも。はずかしい紹介、ありがとうございます」
みんながくすくすと笑った。

お父様の話は長い、とミウナはあくびをこらえた。登場から40分はしゃべり続けている。今回の遠征の苦労話だとか、笑い話だとか。破国人を何人捕らえただとか、強いプリズナーに出逢っただとか。

ふと窓を見て、ミウナは驚いた。

アレエンがいた。子供を二人、引き連れている。パーティの様子をのぞいている。

「お母様、お手洗いに行つてきます」

「早くね。お父様のお話が終わる前にね」

ミウナは会場を出て、外に向かった。

アレエンたちはミウナに気付きもしない。

「こら、なにやってるの」

小声で言った。

「ミウナ」

子供達が笑顔になる。アレエンはばつが悪そうだった。

「こいつ等が、見に行きたいって言うから」

「早く帰りなさい。ここにいと、官僚に捕まえられるわよ」

「わかったよ。でも」アレエンは窓から会場をみた。

「ちょっとくらい、食い物を持ってきてくれよ」

ミウナはしばらく考え、

「わかった。ちょっと待ってて。ちゃんと隠れとくのよ」

子供たちは喜び、アレエンは笑顔になった。

会場に戻ると、演説はまだ終わっていないかった。

お母様に隠れて、パンと魚を持ち出した。

2、3人がミウナを見ていた。けれども、何も言われなかった。冷や汗をかきながら、表に出た。お父様の視線があったのを、この時は気付かなかった。

「ほら」

食べ物を見せると、子供たちは駆け寄ってきた。

一人はすでにパンを齧っていた。その子の頭をアレエンが叩いた。「これは皆のものだ」

叩かれた子は泣きそうになりながらも、こらえて、うなづいた。

「じゃ、わたし戻るから。見つからないように、ここを出るのよ」アレエンの眼が、ミウナの後ろを見て、震えている。

「ミウナ。何をしている」

「お父様！」

アレエンはひざまずいた。

ゴラージュは手を叩き、官僚を呼んだ。

「つまみ出せ」

「お父様、この子達は、わたしのお友達です」

「友達？ こんな、汚い格好の友達なんかいるわけないだろう」

アレエンは顔を上げた。

「ゴラージュ主将。俺を、軍に入れてください！」

国軍服を着た官僚が3人、やって来た。

「ちよつと待て」

官僚は直立不動の姿勢になった。

ゴラージュは、アレエンの眼をじつとみた。

「お父様？」

「真つ赤な、運命だな。連れて行け。国外追放だ。子供もな」

「お父様！」

ゴラージュはミウナのほほを叩いた。

「あんな輩とは二度と言葉を交わすな！」

ミウナはシヨックで言葉を失った。叱られたことすら一度もなかった。

「離せよ！」

アレエンは引きずられた。

「おとなしくしろ！」官僚は力づくだった。

ミウナは頬を押さえて、動けなかった。

「ミウナ！俺は必ず、必ず、夢をかなえてみせるから！！ぜつたい、ミウナを、迎えに行くから！」

アレエンの声は妖精の舞う空に、消えていった。

屋敷に帰ったミウナは、部屋にこもった。

どうしてこんな、すばらしい国にも、恵まれない子供がいるんだろう。どうしてその子供たちは虐げられるのだろう。

わたしなら、この国をもっと良い国、みんなが平等に幸せな国にできる。

しかし、方法がない。アレエンが言ったように、偉くなるしかないんだろうか。

「ミウナ。お客様が来ているのよ。いい加減に出てきなさい」
言われて、部屋を出た。

応接間に入ると、ミウナは力なく挨拶をした。

「何か悩み事かね」

「総理、お気遣いなく」

ミウナはつととして見上げた。

レイト・ゴルガルだった。ゴルガル陸海空軍全権主将の息子で、今は総理大臣の職にある。

彼の横に、子供がいた。ミウナより2、3歳下に思えた。

「バーサク様だ。レイト様の息子さんだよ」

「はじめまして」

バーサクはそっぽを向いている。

「仲良くね。将来の伴侶なんだから」

お母様が言い、戸惑った。お父様は笑っている。

バーサクは無関心のようだった。

これが、運命？

底知れない哀しさと、苦痛がミウナの内に宿った。

こんな運命は、打開しなくちゃいけない。

アレエンは、夢を叶えると言った。

わたしだって、夢を叶える。この国を、幸せな国にするんだ。
みんなが幸せな国に。

第4話 ミウナ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第5話 5年後

父さん、海だよ。

オートはつぶやいた。

青いバンダナが潮風に流れる。精霊船は朝日の下、帆にいつぱい風を受け、だんだんと島へ近づいていく。

「お、いい真珠を持つてるじゃねえか」

筋肉が隆起した、屈強な男がオートに言った。

オートは白い珠を巾着袋に入れ、口を固く縛った。

船室へ戻ろうとして、男の大きい手に肩を掴まれた。

「おいおい、待てよ。おれはその真珠が見たいんだ」

オートは男の手をはじいた。

「触るな」

「ほおおおお。この俺にそんなこと言うかねえ。見たところ、破国人じゃねえみたいだしよ。どっちかというと、コナテ人っぽい」

「そうだ。俺はコナテ人だ」

大男はけらけらと笑った。

「死にたいのかい？ あの島は俺たち破国人の領土だぜえ」

「人を探している」

「それじゃあ、海にでも聞いてみるんだな！」

巨大な拳骨がオートの頬を狙って、打ち下ろされた。

オートは掌で拳を受けた。ぱんつと乾いた音が鳴った。

大男は口をあんどくり開けた。

オートは何事もなかったかのように、手を下ろした。男の放った衝撃はどこかに忘れられたようだった。

「おいおい、ウソだろ。お前、その若さで光人かよ」

「光人？」

「えええええ。光人を知らないで光人だとおお！」

行こうとする。

「ま、待てよ。そうか、お前がこの船に乗れた理由がわかったぞ。仲間をさがしてるんだろ？ 光人を保護しようつていう団体は東西を問わずあるからなあ。バックに奴等が付いているわけか。なるほどなあ」

オートはため息を吐き、巾着袋を再び開けた。

「この人形を、知っているか」

ワラで作られた人形だった。

「ん？ んんん」

人形を袋の中に戻した。

「ならいい」

「い、いや、ちょっと待てよ。どっかで見たことあるような気がするなあ」

「どこで見た！」

大男に迫った。

「い、いや。あれはたしか・・・、そうそう、どこだったかな」

「もういい」

「もうちょっとで、思い出せそうなんだが・・・」

船室から、人が出発めた。20人くらいはいる。

「もうすぐで着きそうだな」

いつの間にか、島は目の前に浮かんでいた。

上陸して、しばらく歩いて、後ろから大男が付いてくる。

「この島はなあ、通称、拷問島って呼ばれててな。まあ、今じゃあ、名前のない島つてのが正式名称だが」

オートは無視して歩き続けた。道はほとんど坂道だった。中央に山があつて、海までずっと裾野が広がっている。

「なんでこんな島に人が来るかっていうと、上質の妖精が採れるんだ。光人の素もとだつて、うようよしてたんだ。まあ、最近はめつきり数が少なくなつたけれどもよ。ほら、最近、赤の素がこの島で目撃

されてるからよ。一攫千金を狙ってるやからが多いんだ。で、これからどこに行くんだ？」

オートは大男をにらんだ。

「お前には関係ない」

「そういうなよ。これも縁だ。俺は運命ってのが大好きでね。一つの出会いは運命を感じないかい？」

「ふざけるな」

オートは呟いて、森へと入っていく。

「おい、そっちは危ないぞお」

言いながらも大男は、オートから離れなかった。

「俺の名前は弩雁なびと。職業は、まあ、今は無職だ」

「なぜ、ついて来る」

オートは木々の間を縫いながら、奥へ奥へと入っていく。

「お前が止まらないからさ」

足を止めたオートは振り向いた。

「止まったぞ」

「まあ、だからといって今さら引き返すのもなあ。奥に何かあるんだ？」

「知るもんか」

弩雁は口を横に広げて笑った。

「わかってるんだぜえ。いるんだろ？ 赤の素が」

「なんだ、それは」

「ああ、お前の国の言い方をすれば・・・、プリズン、か」
「違うな」

「だったら、なんでこんな島に来たんだ。ただの観光か？ あん？」

「そうじゃない。俺の育った村では、く色つき>>って言うんだ」

「っほ。ああそうかい。でもどっちだって一緒だ」

オートは足を進めた。

「ついて来るな」

「まあまあ、いいじゃねえか」

と一歩踏み出したとき、弩雁の足元で、ぱんつと乾いた音がした。その場で、腰から崩れた。腰に、力が入らない。

「じきに治る。じゃあな」

「お、おい。卑怯だぞお！ おく〜い！」

オートはとつと奥へ進んだ。

オートが見えなくなると、弩雁は舌打ちをうった。

「礼儀を知らない子だ」

地面に掌を、ぴたりとつけた。

「気付くなよ、オートちゃん」

一瞬、黄色い光が、弩雁の5本の爪先から地面に向かって走った。

弩雁は片足を上げた。

「なるほど。おもしろい力だ」

弩雁の足の裏には、白い珠が転がっていた。

オートには、ほの赤い光が森の奥に見えていた。<色つき>か、もしくはそれと融合した人間がいる。森の中には、日の光が届かない場所もあるだろう。そこにいるか、それとも融合した人間が力を使っているか。

赤い光は段々と弱くなっていく。

オートは急いだ。

木の根をいくつも越えて、光の出所に向かう。

近い！

赤の光は消えた。

オートは大木の前に立っていた。大木の幹は半径10メートルはある。その根っこは空洞になっていた。中に、人がある。女だ。眼

を閉じて座っている。

「あんた、く色つきくだな？」

女はゆっくり眼を開け、オートを見上げた。

オートは目を疑った。人間のはずなのに、妖精のような雰囲気を出している。

「あら、案外はやく見つかったわね」

女は瞳を細くした。立ち上がり、ゆっくりとした所作でオートの腰に触れた。

「さわるな！」

オートは退いた。

「そのバンドナに似合わず、赤いのね。あたし、そういう子、大好き」

女は笑顔をみせた。

殺気がこもった笑顔を。

第5話 5年後（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第6話 森と女

眉間に皺を寄せ、オートは構えた。指の間に白珠はくじゆを隠し持った。

「ここでやり合う気？」

女は不敵に微笑している。

「人を探している」

警戒しつつ、巾着袋からワラ人形を出し、女に見せた。

「汚い人形」

「見覚えは？」

「知らないわ」

人形をしまう。

「なら用はない」

「私は、あなたに用があるの」

女は、足を交差させて腰を振りながら歩く。木洩れ日が女の凹凸のはっきりとした目鼻を照らした。

「真理を見る森、って、知らない？」

「きいた事はない」

オートは後ずさる。

「その森に住む光人は、あらゆる探し物をみつけることができるらしいの。あなたも誰かを探しているようだけれど、私も探してるのよ」

「そんなく色つき>がいるのか」

「いるのよ。噂では。ふふふ。そういう、く色つき>がね」

後ずさるオートの背に幹が当たった。

女は近づいてくる。

「それなら、お互いに、用はないってわけだ」

「そうかしら。あなたは、うずうずしてるんじゃない？」

「何のことだ」

「ふふ。あなたからは血の匂いがするわ。たくさんね」

女の顔中の血管が、みるみる赤黒くなって浮き出てきた。

「赤のく色つき、か」

どんな力を持っているのか。

オートは踏ん張り、真横に飛んだ。

同時に、オートの後ろにあった木が八方に弾けた。破片がオートの腕をかする。

振り向くと、根元からばらばらになった幹から、黄色に濁った水が噴出している。

「生命にとって、一番大切なのは血。でしょ？」

足元に気配を感じて、後ろに飛んだ。大木の根につまづき、後ろに重心がより過た。

よろめく。

赤い、無数の紐状のものが、オートの足の裏に突き刺さった。

「ぐっ」

痛みはない。

「捕まえた」

足首が腫れて、膨張していく。ふくらはぎに昇ってくる。

「ぐあああ」

どうやら血管を攻撃してくる力らしかった。

「私を見つckerくらいだから、もっと強いかと思ったのに。悪いけど、弱い子は死んで。あなたの中の光人を解放してあげる。もっと適合する人を見つけたいわ」

オートは歯を食いしばりながらも立ち上がった。拳を緩め、指で

丸をつくる。片目を閉じ、丸を覗く。女を丸の中の視野に入れた。

「なにそれ？ 望遠鏡のつもり？」

女は背後の違和感を感じた。

オートは震える手の丸を、徐々にしぼってゆく。

女の周りの空気が歪む。

女は、掌から紐を出し、それを傍の大木の枝に絡めて、飛んだ。

オートの足に進入していた紐が抜けていく。

オートは拳を握った。その瞬間、オートが覗いていた前方一直線上にある木々が丸く削られた。

女がいた地面は半円形に削られた。

穴の開いた巨木の下に、白珠が点々と転がる。

「まったく、何色の力よ、それ」

女はそばの木に赤い紐でぶらさがっていた。

オートは頭を抱えた。バンダナが冷たく、頭を締める。

「あらあら、ぜんぜん適合できてないじゃない」

するりと木から下りた女は胸の谷間から刃物を出した。小型の曲刀で鞘に納められている。女は鞘を抜いた。

「くうう」オートは頭の痛みに耐えるのでやっとだった。この力を使うたびにバンダナが激しく反応する。

女はオートを見下ろした。

「あら、以外に若いのね。自分の運命を嘆くべきよ。ふふ」

曲刀が振り下ろされた。

パンつと乾いた音が鳴った。曲刀はオートの後頭部をえぐる直前で、止まった。オートの掌がそれを止めていた。指の間の白珠が曲刀の切っ先に触れている。

オートはすかさず、曲刀の触れた白珠を女に向けて弾き、飛ばした。白珠は曲刀に形を変えて飛ぶ。

女は体をひねった。しかし白珠は肩に当たった。女の肩が、刃物で突かれたかのように傷を負った。血が流れる。

「くっ、なかなか、しぶとい子。ますますぞくぞくするじゃない」
女の肩から流れていた血がひと塊になって、傷口に戻っていく。

オートは息を切らした。膝がひとりでに震える。

「スタミナはないみたいね」

「うるせえ、ババア」

「はっははは。良くない子。破裂したい？」

女は一步踏み出して、ふいに足を止めた。

オートはきつと睨む。

「ま、そういうことなら、ちょっと面倒ね」
女はオートの後ろを見ている。

「なんだ、ばばあ」

歩きだした女は、オートの横を通り過ぎようとした。

「待て、まだ終わってない」

女の鋭い視線がオートを見た。瞬間、膝を蹴られ、オートは地に手をついた。

「私の名前はU・R。この世界の覇者を探す者よ。もっと強くなりなさい。可愛い子」

女はウインクをして、森の中に消えて行った。

「ぐっ」

あまりのバンダナの冷たさに、大木の根にもたれて意識を失った。

くそ。母さんの幻影が頭をよぎる。

オートは人形を作る母の姿を一瞬、見た。

はっと眼を覚ますと、雑談する声がそばで聞こえる。

丸太で組まれたロツジのなかだった。

中二階でオートは寝かされていた。

階下を覗くと、数人の男女が、がやがやと話し合っている。その中に弩雁の姿があった。

「おはよう、ボウヤ」

弩雁がにっと笑った。

第6話 森と女（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第7話 嘘と黒

「戦争が終わってから、20年。俺はあ、いろいろあった。お前なんて生まれてもないだろう?」

弩雁はオートに話しかけながらも、白磁の器に酒を注いでのどへ流した。男達は弩雁を中心に酒を飲んでいる。オートにとってはくだらない宴会に思えた。

オートは窓によりかかり、外をながめる。闇の広がる木々の合間から虫の音が聞こえる。とっぷり暮れているのに、精霊の姿がない。新鮮な感覚だった。闇がただのつぺりと広がっているだけというのは、珍しかった。

「聞いてるか? まあ、お前は生まれてなかったらどう?」

弩雁がオートの背に問いかけた。

「船は出ないのか」

オートがぼそりと言う。

「こんな夜中に出るわけないだろ。憑精霊きせいれいに殺されたいか」

オートは舌打ちをした。

距離がなければ、泳いででも大陸に帰るところだ。

「かわいくねえ、ガキ!」

弩雁が大袈裟に言い、皆が笑う。

「いったいこいつ等は何のために生きているのか、動いているのか、口を動かしているのか。窓ガラスに反射する男等はただ無駄に動いている物に見えた。」

ああ、金のためだな。オートは軽蔑の視線をくれてやり、窓の外に意識を集中した。虫の声に加えて、野鳥の声も聞こえてくる。今までにきいた事のない鳴き声だった。高い音で、キィィと鳴いている。この島には独特の進化をとげた動物が数多くいるのだろうか。きつとそんな動物のひとつだ。

そうすると、ここには独特の進化をとげた精霊がいてもおかしく

はない。

オートは血管女を思い出し、奥歯を噛んだ。

血の匂いがするわね。

「よし、俺のとおきをおきを見せてやろう！」弩雁が言った。

皆が大袈裟に拍手する。どうやら男達は順番に自慢話をしているようだった。

オートは森林から視線を上に向け、夜空に興味を移していた。

「見る！」

おお！ 男達が一斉に唸った。

「新型じゃねえか！」

オートは振り向いた。

弩雁は掌を目一杯に広げている。掌には、緑色の文字で「縛」と書かれてあった。文字はぼんやりと光っている。

「そりやすげえ」

周りの男達は自分の掌と見比べた。彼等の掌にも「縛」の文字がある。それぞれ色は違う。けれどもどれも文字が薄く、輝きもない。

弩雁は掌を引つ掻き、「縛」の字をはがした。

「金50で売つてもいいぜ。この縛印ばくいんはコナテの、かなり最上級の奴が仕込んだやつだ。原子光人げんしだって、捕まえられる」

「おお！ それはすごい！」

スキンヘッドの男が飛びついた。

「もちろん。これさえあれば、あとは光人に会えるかどうかだ。そこは運しただが」

男は懐から金を出した。

「ついてるね。俺が金欠じゃなかったら、絶対に売つたりなんかしないからな」

オートは鼻で笑った。

弩雁の売ろうとしている縛印は贗物だ。本物なら体が疼く。なん

とも言えない、警戒心、危機感が働く。

警雁はほくほくの笑顔で金を受け取った。そして立ち上がり、
「それにしても、ここはむさ苦しい。外の空気でも吸うかな」
扉を開けた警雁はオートに目を向けた。

「お前も外へ行くか？」

「お前と二人でか。そっちの方がむさ苦しい」
辺りが笑った。

「違うない。じゃ、気をつけてな」

警雁は出て行った。

気をつけて？

「少年よ、こつちで飲もう」

スキンヘッドが言った。

オートは無視をした。一眠りする為に中二階へ戻ろうとすると、
後ろから肩を掴まれた。

振り向くとスキンヘッドだった。

「なあ、無視かよ」

ざわつと何かが擦れる音が、窓の外に聞こえた。

瞬間、オートは姿勢を低くし、床すれすれに屈んだ。

窓ガラスが割れて、10本以上の小型のナイフが飛んできた。い
くつかがスキンヘッドの背に刺さり、後は勢いよく壁に突き刺さっ
た。同時に扉が蹴破られた。

全身黒の人間が3人、ロッジに突入してきた。頭の天辺から足先
まで黒で、一瞬、外の黒と同化して、何も目につかなかった。黒達
は連射式のナイフ銃を構えている。いかにも訓練されているふうで、
隙がない。

スキンヘッドは軽く呻いて崩れた。

男達は啞然とし、両手を上げて降参のジェスチャーをした。

オートはスキンヘッドの体を盾にして、静かに動いた。巾着袋か
ら白珠を五つ取り出した。使える白珠はそれで全部だった。
オートはふつつつと体が熱くなるのを抑えられなかった。

オートファンタジー

その程度で、俺を、殺せると思っているのか？
自然と笑みがでる。
オートは白珠を弾いた。

第7話 嘘と黒（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第8話 追いかけて

あ、とミウナは花瓶を落とした。

「ああ、ごめんね」

くたりと落ちた花びらをかき寄せようと膝を下ろす。

「お嬢様！ 止めてください」

二人のお付がミウナを起こした。

お付が素手で、割れた花瓶を拾う。

「やめてよー！」ミウナは声を張り上げた。

お付の手が止まった。

「いちいち、私に構わないで！」

二人の目は、媚びている。次に何を言い出すのかと、待ち構えている。この、狂ったお嬢様が何を言い出すのかと。

ミウナは哀しくて笑った。

「私はこの花を今までずっと育ててきたのよ。それなのに、あなた達は……」

「申し訳ありません」

お付は手早く花瓶の破片を拾い集めた。

ミウナは憤然として言った。

「やめてって、言ったのに」

ミウナはお付を残して、大階段の広間に向かった。

階下には、バーサクがいた。ミウナの母、シャラナンテと向かい合って立っている。

ミウナは手すりにもたれて見下ろした。

シャラナンテは愉快そうに笑っている。

バーサクは、普段ミウナには見せないような、はにかんだ表情だった。

バーサクの尖った眼つきがミウナを見上げた。

「やあ」

シヤラナントも同時に見上げた。

ミウナは手すりに手をおいて階下に降りた。

「今日は、どこへデートなの？」

シヤラナントが言った。

「どこでもいいでしょ」

「国立公園に行こうと思っています」

バーサクは浅い笑窪を作っている。

「あら、そう。あそこはいいわね。今ごろコナテ薔薇が咲いて、綺麗でしょう」

コナテ国立公園には、10万本の薔薇園がある。首都コナテカイムから車で30分ほど東へ行っただころにある。

「まあ、綺麗」

ミウナは赤、黄、白、青、段々と植えられているコナテ薔薇にいちいち感嘆の声をあげた。ミウナは駆けた。

「ミウナ様」

バーサクを無視して。

国軍服を着たバーサクが追いかける。

二人とも早足になり、追いかけてこのようになった。

「ミウナ、ちよつと待って」

バーサクが突然、「様」を付けないで呼んだ。

ミユナは立ち止まる。

「今、気安く、私を呼んだ？」

バーサクはゆっくりとミユナに近づいた。

「気のせいではありませんか？」

「そう・・・」

緑色のコナテ薔薇が咲いている。

ミユナは屈んで、薔薇に手を添えた。

「この色、綺麗ね」

一緒に屈んだバーサクは、緑薔薇の茎を持ち、ぱきりと折った。

「あっ」

「どうぞ」

この薔薇園では花を取るのには違法だった。

ミュナはバーサクの折った薔薇を受け取らなかった。

バーサクは、手に持った薔薇の花を棄てた。

「綺麗と言っても、欲しいわけじゃなかったの」

ミュナは歩く。

「ああ、そうですね」

やっぱり、どこか住む世界が違う、とミュナは感じていた。私は、こんな人と一緒になるべきではなのでは？

「いい天気ですね」

バーサクが言う。

「そうですね」

突然、バーサクがミュナの細い手首を掴んだ。

ミュナの腰に、手をまわす。

「ミュナさま、そろそろ、唇だけでも、許していただけませんか」

ミュナは顔を赤くした。

「そういうことは、結婚してからにしましょう」

バーサクの顔を手で押さえる。

「私は今すぐに、証がほしいのです」

ミュナの両手首を、バーサクが押さえた。バーサクの視線がミュナの胸元をさす。ミュナは歯を食いしばった。

「あ！」ミュナはバーサクの脇の向こうに、人がいるのを目で促した。

バーサクは振り返る。

国軍服を着た青年がこちらに走ってくる。

青年は、バーサクの前で直立不動の体勢をとった。

「なんだ」

バーサクは不機嫌に言った。

ミウナは胸元を正す。

「百虎殺しが、みつかりました」

バーサクは目を見開いた。

「ミユナはたじろぐ。バーサクの目つきが怖かった。」

「どこだ？」

「破国領の、島です」

「破国領だと？ くだらない団体が、関わっているのか」

「いえ、情報によりますと、単独だそうです」

「馬鹿な。で、捕獲したのか」

直立の青年は、首を横に振った。

「指揮は誰だ」

「ゴゾ副将であります」

バーサクは、顔だけで笑った。

「ふふふ。それは、それは。青い人が怒っているだろうな。ふふふ」

ミウナは先に歩く。

百虎殺し。4年くらい前に起こった、コナテ国軍精鋭「百虎」百

人が一夜で壊滅した出来事。

バーサクと国軍青年はいくらか話をしたあと、別れた。

「申し訳ありません。急用が」

バーサクがミユナに近づいて言った。

「昔の、殺人鬼の事？」

「いいえ、いいえ。ミユナ様には、関係のないことですので」

「そうね。じゃあ、追いかけては終わりということね」

「そういうことです」

バーサクは、にたりと笑った。

第8話 追いかけてこ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。

第9話 憑精霊

オートは肩をまわした。すこし、凝っている。

ロツジの出入り口に向かうと、後ろから、瀕死になった黒ずくめの者がよろよろと向かってきた。まだ生きているのかとうんざりする。

白珠を弾く。

珠は黒ずくめの、頬に当たる。瞬間、頬が拳骨の形に凹んだ。

黒の者は吹き飛んだ。ロツジの壁に当たり、力なく倒れた。

たいした力だ。オートは息をつく。黒の者に当てた白珠には弩雁のパンチ力が保存されている。船上で受けたものだ。

ロツジの中では、がたいの良い男達が啞然とオートを見ている。

オートは白珠を拾い、外に出た。

風が冷たい。ロツジの後ろの木々がざわめいている。

これだけの騒ぎを起こしても、妖精の姿が一つもない。無数の星だけが輝く夜は気味が悪い。

ゆつたりと波の音が聞こえる。海は荒れているわけではないようだった。

「おみごと」

ロツジの裏の森から、弩雁がやってきた。

「お前、知っていたな」

オートが言う。身構えて、弩雁の動きに注意した。

「ははは、たまたまだよ。俺は悪運が強くてね」

白珠に封じてあった弩雁の拳の威力は、並のものではなかった。格闘の素人ではない。

「貴様、何者だ」

弩雁はうすら笑いを消さない。

「構えるなって。こええだろ。光人に睨まれるなんて、生きた心地がしねえよ」

オートは後ずさった。至近距離はオートの間合いではない。

弩雁の体内からはく色つきくの気配はない。

「あれ、まだお前にお客がいるみたいだぞ」

はっとオートは振り向いた。

弩雁に気をとられて、後ろに気が廻っていなかった。

8つの影が目の前に並んでいる。どいつも黒い。闇にまぎれて、姿はとらえにくい。そうとう闇の中での戦いを訓練しているのだから。

後ろに弩雁、前に8。

「おい、手伝え」

弩雁に言った。

「報酬は？」

影がにじり寄ってくる。

「帰りの船賃でどうだ」

オートはさがった。

「安すぎだ」

「いくら欲しい？」

弩雁が飛び出した。影の一人を、拳で吹き飛ばす。短いうめきが聞こえた。

「報酬の話は後でな」

弩雁はオートを見て、片目を閉じた。

オートは白珠を弾く。黒の者一人が吹き飛ばす。

「法外な金は払わないぞ」

ナイフを構えて突進してきた黒を、弩雁は足払いですくった。宙に浮いた黒の腹に、拳が叩き込まれる。

「金はいらねえや」

連続でナイフを突き出してくる黒。オートはいちいちナイフを避ける。隙を見て、手首を取った。間接をねじる。地に伏せさせ、顎を踏みつけた。

「報酬はいらないんだな？」

弩雁はオートに向かつて、大地を踏みしめた。同時に拳を突きを放つ。風圧が走る。オートの後ろをとっていた黒が、風圧に巻かれ、空高くあがった。

オートは弩雁に向かつて白珠を飛ばす。白珠は弩雁の後ろをとっていた黒の額へ走る。白珠には赤の女が振り下ろした曲刀の力が込められていた。

「いいや、報酬はいる」

弩雁はひるむ黒の頭上に、かかとを落とした。めきつと嫌な音がする。

「なにが欲しい？」

オートは連続バク宙で黒のナイフをかわし、むきになって追ってきた黒の頭を飛び越え、後ろをとった。首に腕をまわし、力を込める。じたばたした黒から、力が抜ける。

「手伝って欲しい件がある」

弩雁が言った。8人の黒の者は一人として動けないようだった。

オートは息をつく。弩雁と赤の女、二人の力を入れた白珠は消滅したようだった。白珠は中に込めた力がなくなると消滅する。弩雁の力は永くもつたほうだ。

「やっかいなことは、断るぞ」

オートをちらと見て、弩雁は伸びをした。準備体操の仕草をした。「その、なんていうか。でかいのが残ってるぞ」

地面の振動。

海の方から足音が聞こえる。

「人ではない、か」

オートが呟いた時、巨大な影が飛んできた。地響きと共に着地した影は、ぎゃああああ、と吼える。

オートは見上げた。5メートルはある。手足が太く、巨大なゴリラのようだ。全身に管が生えている。管はよろよろと左右に蠢く。

「陸に憑精霊とは、珍しい」

警雁も見上げた。

「詳しい交渉は、後回しだ」

オートは怪物の横をとった。

「まったく、同意だな」

怪物から伸びた管が警雁を襲う。

警雁は腕で管を払った。

ぎゃああああ。怪物は狂ったかのように、吼えた。

第9話 憑精霊（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。
更新は不定期です。

第10話 弩雁(どがん)

二足の怪物は、ゴリラのように両手を地面に突いた。

怪物の胸元から伸びた管が弩雁の腕に絡みつく。弩雁は筋力で振り払った。

「きもちわりい！」

弩雁は切り取った管の匂いを嗅いだ。

「ぬめぬめのくっさくさだぞ、これえ」

「こつちに投げるな！」

オートは飛びさがった。

ぎゃああああ！ 憑精霊が吼える。

弩雁は大地を踏みしめ、空を打った。衝撃波が憑精霊の巨体に衝突した。

「あら？」

憑精霊はびくともしない。

管がオートに伸びる。紙一重でかわした。

月明かりが憑精霊を照らす。

憑精霊の顔部分には、無数の管の奥に鋭い牙が生えていた。

「おい、数秒でもいい、動きを止める」

オートが管をいなしながら言った。

「お、困った時の光人様とはよく言ったものだが」

ぎゃああああ！ 憑精霊の全身から生える管が束になり、拳の形になった。

弩雁は腕を十字に構え、防御の姿勢をとった。瞬間、巨大な拳となった管が弩雁に直撃した。

「ぐっ！」 弩雁は後ろに吹き飛び、ロツジに体をぶつけた。ロツジが揺らぐ。

オートは舌打ちした。もっとやれる奴だと思っていたが、容赦なく、管の塊がオートめがけて振り下ろされる。

憑精霊は雄たけびをあげながらオートを執拗に狙う。

オートは片手で丸をつくり、片目にあてる。

力を使えば勝てる。しかし憑精霊の管が絶え間なくオートを襲ってくる。

ぎゃあああああ！ 憑精霊は飛び上がった。巨大な影が月と重なる。

塊になっていた管がばらけて、地上の広範囲に降り注ぐ。

オートは身を縮めた。避けるには範囲が広すぎる。

歯を食いしばるオート。細かい管が背に当たってきた。

管の勢いは徐々に強くなっていく。

オートは後ろに飛びながら、背で管を受け止める。

「こんなところでえ！」

オートは必死に、憑精霊のいる上空を捕らえようとした。

その時、管の動きが止まった。

禍々（まがまが）しい気配を感じ、オートは振り向く。

弩雁が憑精霊に向かって手をかざしていた。

掌に、「縛」の文字。弩雁がスキンヘッドに売っていたやつだ。

「お、安物にしては、効くじゃないか」

弩雁が言った直後、オートは力を使った。

憑精霊を白珠で囲む。

ぎゃあああああ！ 憑精霊は暴れ、もがく。

しかしオートの力が憑精霊を押さえた。

収縮する白珠。

やがて雄たけびも聞こえなくなり、ころりと小さな白珠が地に落ちた。

「ふう」

弩雁は息をついた。額から血を流していた。

「まったく、運が悪い。憑精霊がいるとは。おい、大丈夫か？」

オートは膝を曲げ、頭を抱えた。力に反応したバンドナが頭を締め付ける。

弩雁はオートの肩に手を触れた。

「触るな！ なんでもない」

オートは立ち上がった。バンダナの呪いには慣れてるつもりだった。

気力で歩き、憑精霊を封じた白珠を拾う。

白珠に封じることのできる力は、封じたものの力にも関係する。

オートは憑精霊を封じた白珠を、月の光に照らした。滑らかな光沢が美しい。この世の中で、これ以上綺麗なものを見たことがない。

オートは手に入れたばかりの白珠を巾着袋に、入れた。

「さてさて」と弩雁が言う。「今日は本当に、ついてない。つまり、破国で言うところの、打撲に骨折、だ」

「なに？」

オートが弩雁に振り向いた瞬間、生暖かい風が吹いた。風は島中を駆ける。

「良い力を持っている」

風が言った。

オートは辺りを見回す。人や憑精霊の気配はない。

「厄介なものに、みつかった」

弩雁は首を回した。準備運動をしているように見える。

「いい加減、戻って来い」風が言う。

「おい、走るぞ」

弩雁は島の奥、森の方を指した。

ただ者ではない圧力が島を覆っている。

空を切る風音が強くなる。

弩雁は森へ走った。オートも続く。

「また逃げるのか、弩雁！」

「おい！ てめえの面倒事は自分で解決しやがれ！」

オートは先を行く弩雁に叫んだ。

「破国で言うところの、腐りかけたら腐るまで、だ！」

風は突風となって、木々を揺らす。

「コナテ人にわかるように言え！」

ふっと風が止む。

「あらら、上陸したみたい」弩雁が走りながら頭をかく。

「なにが？」

「お偉いさん、が」

一瞬、烈風が島の上空を吹きぬけた。

「百虎殺しの弩雁」

風に乗って聞こえてきた声は、含み笑いをしていた。

第10話 弩雁(どがん) (後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。
更新は不定期です。

第11話 道行けば出会い「前編」

深く暗い洞穴は、点ほどの光を奥に含んでいる。光は薄青い。島の森深くに、弩雁はオートを案内していた。

腰を屈めて、洞穴を歩く。

洞穴は石で固められている。人工のトンネルだった。石は冷たくしっとり濡れていた。

オートは疑っていた。

「おい、本当に船があるんだろうな？」

先に行く弩雁は振り向く。

「あつたりまえだ。さっきも言っただろ？ 俺のバツクには、大団体がついている。この先には、なん十万トン級の船が俺たちを待っている」

「うそくさい……」

オートは苦笑する。

「おい、船代も、もらうからな」

「ふざけんなよ。俺はとぼちりだろうが。白虎殺しさんよ」

弩雁はオートの背を叩いた。

「誤解だつつに。いろんな事情で、濡れ衣を被せられたんだって。とにかく特別に、船代も依頼の報酬としてやろう」

「なんで上から目線だ」

「憑精きせい霊は手助けしただろ。さすがのプリズナーでも一人じゃ敵わなかつたろ」

二人の足元に水が張ってきた。水は波打っている。

オートはさっと、指に水を付け、舐める。塩辛い。

「で、船でどこに行くつもりだ？」

「コナテカイルに向かう」

「正気か？」

オートは吹き出しそうになった。コナテカイルにおける、破国人

への差別はひどい。コナテ人に比べて破国人は体格が良く、手足が若干長い。弩雁はみごとに破国人の特徴をそなえていた。

「正気だとも。しかもその国で、犯罪を犯そうとしている」

オートは顔をしかめた。

「誘拐だ。得意だろ？」

「あいにく。お前みたいに前科はないので、得意とは言えないな」

奥の光が大きくなってゆく。海水が膝までせまってきた。

「お前は見張っているだけでいい。なにせ俺には強大な仲間がいるからな」

「例の、大企業、か」

弩雁は得意そうに頷いた。

海水の抵抗が強くなり、オートは足を前に動かすのでやっとになった。

洞窟の出口に近づく。

「あら？」

弩雁の疑問符は至極当然だった。

巨船などない。

「ああ、確かに、軍艦並だ。しかも妖精憑きの」

視界がひらけたとき、目の前にあつたのは小船だった。

小船の船底が薄っすらと白く光っている。

突風が吹いて小船を揺する。

「逃げられると思うなよ」言葉が突風によつてきた。

「なんだ、この声は！」

オートは振り返る。

「気にしない、気にしない」

弩雁は小船に近寄った。

船底の光が輝く。

「おい！ 野郎ども！ 舵を持ってえい！」

もやもやとした光が子供の形をつくった。

「なんだ、これは」

オートは光の子供を観察するしかない。

「おらあ！ 乗るなら乗る。乗るなら飲むな！ 飲むのか乗るのかはつきりしやがれ！」

「はは、知らないのか。妖精を憑けた船だ」

「いや、知ってるが……」

弩雁は小船に乗った。

「お前、大団体とやらで優遇されてないな」

オートも小船に乗った。体格の良い弩雁と、二人で一杯になるくらいに広さだ。

「ば、馬鹿にするなよ。行け！ 大海原に向かって！」

小船はびくりとも動かない。

「おい、そっちこそ馬鹿にするなよ！」小船が言う。正確には、小船に憑いている妖精が言ったのだが。妖精は続けて、「海っていうのは、自分の力で渡りきってこそだろうが！」

怒っている。

オートと弩雁の両脇に、オールが現れた。船の作業らしい。

「けっ。この船に憑いて100年、舐められたものだけ。さあ、漕ぎな」

「ふざけんなよ。船に憑いている小妖精のぶんざいでえ」

弩雁は足踏みをした。

「はっはっは。痛くも痒くもねえ」

「こっこんのおー！」

「いいかい？ この全海ぜんかいを駆けるシヨウ・導どうは何者にも屈しないのさ」

シヨウは船先に子供の像を表した。白く、眩しい。

弩雁は後ろを向き、オートに意見を求めた。

「漕ぐぞ」

オートは冷静だった。なにより、得体の知れない風から逃れたかった。

「しかたねえ」弩雁はオールをもつ。

「良い心がけだ」

触先のシヨウ・導が腕組みをしてうなづく。

「どうしても駄目なら言え。特別に力をかしてやる」

「はいよ、ボス」

警雁の返事に、シヨウ・導は満足そうにうなづく。

第11話 道行けば出会い「前編」(後書き)

・

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。更新は不定期です。

第12話 道行けば出会い「中篇」

いつか私はお父様に訊ねたことがある。

「お父様のお仕事ってなあに」

私は幼かった。

お父様は言った。

「平等な世の中、それがこの世の理想だ。ミウナ、人は生まれながらに平等ではないのだよ。つまり、生まれた時から幸福なものと、不幸なものがある。私の仕事は、人を幸福にすることだ」

「私は幸福？」

お父様はたまにしか帰ってこない。それは私のなかで不幸だった。

「幸福だよ。とびつきりね」

納得がいかない私は頬をふくらませた。

「私は不幸よ」

お父様は笑う。

「おお、ミウナ、不幸なミウナ。なにが不満だい？」

お父様が家に居ない、とは恥ずかしくて言えなかった。

そこでお父様は、都のはずれにある森に住む孤児の話をしてくれた。

彼等、彼女等は不幸だという。

その日生きるのもやっとで、泥棒は当たり前前の生活だという。

本当にそんな子達がいるのだろうか。

話を聞いた翌日には、お付の者を連れて、都はずれの森へ出かけた。

汚い子供達には小さな虫がまつわり付いていた。

連日、私はこっそりと、彼等のリーダーと会っていた。食料、お金、衣類、なんでもあげた。不幸な彼等をそれらで助けられると思っていた。

お父様が彼等との関わりを知った時、はじめて私を叩いた。

沈みすぎるベッドに体を横たえ、あの夜の目を思い出す。

お父様は矛盾している。今なら声をはりあげて抗議しただろう。不幸な人を幸福にするのが仕事なんじゃないのですか。

森に住む、不幸な子供等は一人もいなくなった。

お父様が処分したのだ。

処分、ああ、処分。私は泣きたくなる。

あの目を思い出す夜は眠れない。

私はあの子達を幸福にしたいだけだった。お父様やお母様が怒る理由なんてない。

ベッドの軋む音が隣の部屋からきこえる。

隣はお母様の部屋だ。

一時間ほど前、バーサクが屋敷に入ってきたのを、窓から見ている。

バーサクは足音もたてず、階段を上がり、隣の部屋の扉を静かに閉めたに違いない。

何なのだろう、この世の中の仕組みは、どうなっているのだろう。

柔らかな毛布に顔を沈めた。

眠気が襲ってくる。鳴り止まない軋みには一定のリズムがある。

リズムが子守唄のようになる。

「どうか、目が覚めませんように」

声が出て、はっと目を覚ました。

恐怖で声が出ない。

闇よりも深い、真っ黒な眼をもつ者に抱えられていた。

「きゃあああ！」

「うむ。やはり目を覚ました。覚めませんように、と言ったのは、どこかに覚めて欲しいと思う願望があったのだ」

扉が勢いよく開く。

「どうなさったの？」

お母様の悲鳴。

扉の前に崩れるお母様に、私は手を伸ばす。

「たすけて！」

お母様は震えていた。

「うつむ、こういう事態も、どこかで希望していたのだ。私は抱えられたまま、身動きできない。黒い膜に包まれて指一本動かさない。」

黒い眼の者は、お母様に背中を向け、窓に向かう。

あっと思う暇もなかった。

窓を突き破り、外に飛び出た。

ガラス片が頬を切る。

飛んでいる。

地面との距離はいつまでも詰まらない。浮上さえしている。

「降ろして……」

全身が強張る。

「いい月じゃないか」

夜空に、下弦の月が薄く引かれている。

受け皿のような月は、願いを叶えてくれる。お父様が昔そう言っ

たのを思い出す。

緑色の光線が月を横切る。

ふいに、高度が低くなった。

「ぎゃあああ」

黒眼の者が叫ぶ。

急降下する。

眼下の森が、ぐんぐんせまってくる。

苦痛の雄たけびを上げる黒の者は、煙のように掻き消えた。

支えのなくなった体が宙で回る。眼を閉じ、歯を食いしばる。気をしっかり持って、意識が遠くなるのを耐える。

暖かい光に、私は目を開けた。

緑色の光に包まれている。

ゆったりと、着地した。

緑の光は四散した。

虫の鳴き声と、不思議そうにこっちを見る妖精たち。

静かな森は、何事もなかったかのように、不気味なほどに、静かだった。

第12話 道行けば出会い「中篇」(後書き)

・

読んでいただき、ありがとうございました。

度々修正がありますが、ストーリーに変更はありません。
更新は不定期です。

第13話 道行けば出会い「後篇」

「兄い、破られたぜ」

コナテカムイの遙か北、砂嵐吹き荒ぶ丘の上。不毛の大地を眺めながら、兄弟が背中合わせに語らう。

「失敗か」

「いや、次の手はうってる。次の手を打っていたということは、失敗する可能性があったということだ、兄い」

「くだらん」

「兄い、くだらないのならやめればいい。しかもうやっちまった」「まかせる」

「どこに行くんだい、兄い」

「赤の坊や」

「ああ、あのラッキーな坊やの所か」

兄は立ち止まって、見上げる。風向きを気にしている。

「いや、アンラッキーな坊やだ」

兄弟は別れた。

弟は目を閉じ、どかっとう胡坐を組んで合掌した。黒いもやが弟の全身から立ち昇る。凝縮した黒いもやは、遙か南のコナテカムイに向かつて飛んだ。暗黒の光は生き物のようにうねうねと、目標にむかう。

「あの女なんて信用していいのかよ、兄い」

弟は呟き、にたと笑った。「兄いがない時に言うってことは、兄いに聞かれたくないってことだな」一人、納得する。

オートはシュウ・導をコナテカムイの海岸に寄せた。
夜の海岸は静かで、波の音が規則的に引いては寄せる。

海岸線にちらほらとある仄かな光は妖精達だった。

「野郎共、はじめての海にしちゃ、上出来だ」

オートと警雁はへとへとになって、狭い船上に寝転んでいる。

「人使いの荒い船なんて、はじめてだ」

「うるせえ、起きてオレを隠せ、ムキムキドラにアオバンダマン」

「ドラんじゃねえ、ど・が・んだ！ それとムキムキをつけるんじやねえよ」

「うるさい、ムキドラ」

半透明の少年と警雁が睨みあう。

オートは船を降りた。

「ここはコナテのどの辺りだ」

「さすが、アオバンダマンはムキドラとちがって話がはやい」

警雁はシュウ・導の後頭部をなぐった。

「いってえ」

「お、当たった」

「不意打ちは卑怯だぞムキドラ！」

オートはシュウ・導から降りて、船を押しした。

「ともかく、あの岩陰に隠そう」

「お前も手伝えよ、ムキドラ」

警雁の二発目はシュウ・導の頭をすり抜けた。

「こつちだよ、こつちだよ。ミウナ、こつちだよ。」

たとえば、そんな声が聞こえたなら、どれだけ力強いだろうか。

暗闇の林にはところどころに妖精の仄明るい姿があるだけだった。

ミウナは方角もわからず、ただ自分の屋敷だろうと思われる方向

へ、感覚だけを頼りに歩いていた。

「怖い……」

妖精たちは、ミウナが近づくと、姿を消す。

寝間着が小枝に引っ掛かる。

出口のない迷路にはまったきがして、立ち止まった。辺りを見回す。暗闇に何かが飛んでいるきがして、身をすくめる。自分の吐息が震えている。

いや！ いや！

ミウナは走った。この暗闇から逃げたかった。

海岸沿いの岩場の影に、シュウ・導を隠した。

「いいか、事を済ませたらとっとと連れて来い。ここの先の村から、コナテカムイまで、運搬用の憑精車が走ってる。それに乗れば五分で中心部に着く。そこから大通りを南に。十件目が目的の屋敷だ」

「はいよ、マスター。ちゃんと、ここで待ってるよ」

弩雁が気のない返事をする。

オートは、シュウ・導から離れた。林へ歩く。

弩雁が後ろから付いて来る。

こいつくらいなら、どうにでもなる。オートは、弩雁や喋る船と同行する気はなかった。

「おい、運搬用の船があるんだってよ」

「大丈夫だ。聞いていた」

「大丈夫は強がり、っていう諺が破国にはあるんだ」

林の手前に、二人は止まった。

「それで、どっちに行けって言うんだ」

オートが弩雁をみる。

「これは防風林だ。そんなに深い森じゃねえ」

弩雁が前に行く。

オートは弩雁の太い首に飛びつき、腕を巻きつけた。

「ぐっ」

「悪いな。ここまでの船賃は置いていく」

「それはないぜ、アオバンダ」

弩雁はオートを背負ったまま、強烈な勢いで背を樹にぶつけた。樹が二つに割れる。

オートは、弩雁の肩に足を乗せ、回避していた。

膝を落とした弩雁は苦しげにうめく。

「くそつ、必ずみつけるからな、お前に逃げ場はない」

弩雁は地面に顔をつけた。

しばらく首を絞めていたオートは、弩雁を軽く蹴って、起きないのを確認してから、防風林に入った。

走り疲れたミウナは、果てのない木々の連続にうんざりしていた。大木に身を寄せて座り込む。

何なんだろう、私の人生は。

泣きたくなると同時に、泣いた。

泣き声さえも震えている。

空を見上げて、気がつく。ああ、きつとあの子達も、こつやって泣いていたんだろうな。

そこから芽吹くのは、恨みという感情だった。

どぶして私が、どうして私が。こんなに苦しんでいるのは何故だろう。私は私なりに生きてきただけなのに。

冷たい風が、木々に冷やされ、涙で冷える。

もう、一歩も歩きたくない。ここで息を止めて、死んでしまえば、どれだけ楽だろう。

ミウナはわざと首をかしげ、力ない髑髏のように、倒れた。

ああ、落ち葉はなんて気持ちがいいんだろう。

なんでこんなに、包容力があるんだろう。

オートは、掌に収まっている顔を、どうしようかと悩んだ。林のなかで倒れる少女の姿は、夜の木々の間には不似合だった。裕福な家庭のダンスパーティー。頭によぎったのは、未成年の飲酒を、さも重罪のようにあつかう、楽しげなパーティーだった。

そんなお嬢さんが、なんで妖精も少ないこんな防風林に倒れようとしていたのだろう。

オートは、早くこの林を抜けるべきだった。弩雁がいつ息を吹き返すかわからなかったし、弩雁の背景には、それなりに大きい組織があるのは確かだった。

しかし、掌の少女は微笑んでさえいる。

オートは、そっと少女の頭を地面に置いた。

どんな宝物を盗んだ時よりも、心臓が高鳴る。

「ふう」

気になりつつも、オートは防風林を通り抜けることに意識を集中した。

はっと、ミウナは意識を現実に戻した。

少年の背中が目の前にある。

空に、黒い塊がうねうねと形を作っていた。

それは少年の遙か頭上でうごめいている。

「いや！」

振り向いた少年は、ミウナの視線を見て、上空を見上げた。

少年がこつちに走ってくる。

手を、取られた。

「走れ！」

オートは少女の手を取った。

こんなに背筋がぞくぞくするような感覚は初めてだった。

あの黒い塊には、殺気が濃縮されている。

あれは、俺を殺す気だ。

「いたい！」

つい、少女の手を強く握ってしまった。

殺す気だと？ ふざけるな。俺に勝てると？ この、俺に。

少女の手を離す。少女は根につまづいて、転がった。

やってやるうじゃないか。お前の殺気と、俺の殺気、どっちが優れているか、思い知らせてやる。

ああ、あの子達は、いまでも戦っているんだ。家もなく、お金もなく、ただ衰弱していく己と向き合わなければならぬ、あの子たち。

立ち上がったミウナは、少年の姿を見て、ふいにそう思った。

第13話 道行けば出会い「後篇」(後書き)

・ ・ ・

読んでいただき、ありがとうございました。
更新は不定期です。

第14話 片鱗

頬に伝う汗をぬぐう隙も見せられなかった。

黒い塊はうねうねと漂う。

塊を中心に、黒い突風が吹いた。

「きゃあ！」

少女が地面にうずくまる。

凄まじい殺気がオートの心をえぐった。

殺したんだろ、コロシタンドロ？ いっぱい、イッパイ。コ

ロシタンドロ

オートは頭を押さえた。言葉が勝手に入ってくる。

「なんだ、これは」

親を、友人を、殺したんだろ。

「だまれ！」

バンダナが、冷たく反応する。オートの内側から溢れる力を凍らせる。

黒い塊は、凝縮し、人型になった。

眼が漆黒に輝いている。

人の道を外れたものよ、あがき、のたうち、いったい、どこに向かっているのだ。

「うるせえ……うるせえええ！」

オートは、黒の者に向かって構えた。手が仄かに、白く光る。

コロシテコロシテコロシテコロシテ。

白い膜が、黒の者を包む。同時にバンダナが凍りつく。

「くそおおおお！」

オートは地面に膝をついた。

力が入らない。

ここ数日で力を使いすぎたのか、バンダナの反応が凄まじい。白い膜が、ぱんつと割れた。

黒い瞳がオートを見下ろす。

苦しむがイイ。過ちは、お前を蝕み、殺すだろう。
黒の者は、霧散した。

オートは激しく地面を叩いた。

まだ弱い。まだ、まだ……。

目の前が暗くなる。

少女が、オートに近づいてきた。

「だ、だいじょうぶ、ですか」

遠ざかる意識の中で、オートは思った。

近寄るんじゃない、オレに近寄るんじゃない。

コナテカイムの遙か北。

はっと眼を覚ました弟は、立ち上がった。

とつても、おもしろい。オレがおもしろいと思っただけは、

兄もおもしろいって思うはずだ。

弟は、吹き荒ぶ流砂をもろともせず、黒い瞳を地平線に向けた。

第14話 片鱗（後書き）

・

読んでいただき、ありがとうございました。
更新は不定期です。

第15話 幕間の章 5年前

肌寒さを感じて、オートは目を覚ました。

小動物の鳴き声、ほのかに光る精霊たち。

曇り空に太陽はない。

ここは、どこだろうか。鬱蒼と茂る原っぱの真ん中に、オートは倒れていた。

村を出て、ひたすらに歩いた。歩かなければ、あの青い人が追いかけてくるんじゃないかと、怖かった。

頭が痛い。額を触ると、冷たいバンダナがあった。

がさごそ、と草が揺れた。

立ち上がる。くさむらに、黒い頭がある。

「あの、ここは」

声に反応したのか、頭はオートから遠ざかった。

オートは追いかけた。

草がちくちくと肌に刺さる。

「おい、止まれ」

いつのまにか、後ろに人がいた。

ぼさぼさの長髪で、清潔とはいいがたい。歳はオートとさほどかわらなそうだった。

「あの、ここは、どこでしょうか」

怪訝な顔をみせた少年は、オートをじろじろ見る。

「捨てられたのか」

オートはぎくりとした。

捨てられた？

違う。けっしてそんなことはない。

憎しみのこもった眼を思い出す。あの、父さんの眼。

「探してるんだ。母さんを」

「はっ」少年は笑って、「こんなところですか」と両腕を広げた。

木々に囲まれた空間は、街の騒音がまったく聞こえない。近くに村さえないのだろう。

「おい、みんな、大丈夫だ。出て来い」

少年が言うと、草むらから、次々に人が立ち上がった。十人、それ以上いる。

誰もが子供で、目の前の少年が一番年上のように思う。

オートはたじろいだ。

子供たちは、鍬や棍棒を持っている。

「な、なにするんだよ」

少年はオートに近寄った。

「どきな」

「え」

少年に胸を突かれ、オートはさがった。

しゃがんだ少年は、草を掻き分けた。

木の扉が草に隠されていた。

扉を、少年が開けた。

梯子があった。

「来い」

「いや、僕は、別に」

少年の目つきは怖かった。

「じゃ、いいさ。でも断るなら怪我するぞ。死んだって、どうせだれも探していないんだろ。ここを見られたんだ。俺としては、死んでくれた方が助かる」

オートは梯子に足をかけた。

後ろを向けた時、腰にぶら下げていた巾着袋を少年に取られた。

「なんだよこれ」

中身を見た少年が驚く。

「宝石じゃないか！」

「あげるよ」

それは、村でオートが目覚めたとき傍らにあった白い球だった。

村での出来事はよく思い出せなかった。
なにか、真つ白い閃光が頭にこびりついている。
少年は何も言わず、自分のポケットに巾着袋をねじ入れた。

洞窟は広がった。

精霊ランプの青白い灯がほのかに照っている。

オートの後ろから、ぞろぞろと子供たちが付いてくる。

「ほら、みんなは持ち場にもどれ」

少年はみんなを振り払う。

「昨日、闇の鳴る夜だったろ。それで、警戒してるんだ」

「警戒？」

「ああ。化け物がでるからな。闇の鳴る夜があると」

と少年は、オートを扉が付いた部屋に入れた。

本棚と、大きい机。

机には、地図が広げてあった。

「うわあ、地図だ。はじめて見た」

「……それで、お前は親に捨てられたのか？」

「いや、そんな」

「捨てられたんだ。そういう自覚をもたなければ、苦しいだけだ」

本当に、捨てられたんだろうか。あんなにやさしかった母さんが？

オートはうつむいて、何もいえなかった。

「ここに住め」

「え」

「食料もある、着るものもある」

「でも、僕にも家が」

「自覚しろ！」

少年は机を叩いた。

肩をすくめたオートは父の暴力を思い出し、強張った。

「……」

オートは頷いた。

「よし。俺はゾフィー。お前は？」

「オート……」

「ん。名前があるだけでしたな。よろしく。オート」
ゾフィーの差し出した手を、おずおずと握った。
「豆だらけの掌だった。」

オートファンタジー

第15話 幕間の章 5年前（後書き）

更新は不定期です。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1980c/>

オートファンタジー

2009年5月19日19時45分発行